



経済学の学び方（テキストの読み方）

経済学は、日頃私たちが新聞やニュースで目にする経済問題、経済事象の背後にある本質的な動きを明らかにしようとするものです。現実経済という生々しいものを対象にするからこそ、むしろ基本となる経済の「見かた」をあせらずじっくりと養うことに意味があります。経済学の習得には優れたテキスト（基本書）を丁寧に読むことが必要です。どのようなテキストを選ぶにせよ、まず以下の事柄を肝に銘じておきましょう。

① 「入門書」 1 (とくにミクロ・マクロ・経済数学・統計) は 1・2年のうちに揃えよう！

経済学を学ぶにおいて、まず必要となるツール（道具）が経済数学です。そのツールを用いて学ぶ経済の基礎的根幹科目がミクロ経済学・マクロ経済学および統計学（3年次からは計量経済学）となっています。したがって、経済数学・ミクロ・マクロ・統計学の4つは出来るだけ早い時期に受講して頂きたいものです。また、そのための入門書も1年生のうちにそろえておきましょう。

「必修（教養）科目と時間割がバッティングしたので専門（基礎）科目が今年度履修できない」とことを言い訳にしてはなりません。シラバスや講義のHPを参考にし、ときには教員の研究室を訪ねて相談しながら、指定または推薦されている教科書や専門書を早めに購入して読みましょう。「ミクロ経済学」「マクロ経済学」「計量経済学」は、どの大学の経済学部でも「コア科目」と呼ばれる基本中の基本科目です。たしかに、これらの科目は、ある程度習得するまでに少なからぬ労力を必要とします。最近、「みるみる分かる……経済学」「短期間でマスター……経済学」といった本が（決してこれらの本を非難するわけではありませんが）数多く出回っていることは、本来経済学をきっちりマスターするにはかなり時間がかかるこの証左ともいえます。皆さんは経済学部に入学し、これから腰を据えてしっかり勉強する時間があるのですから、まずはじっくりと基本書の理解に努めて欲しいと思います。



林宰 司・新井圭太・中野正裕



経済学の入門テキストはコレだ！



MASAKAZU IMAI

経済学部助教授。
専攻は国際ビジネス論、移行経済ビジネス論、民間企業で海外営業、国際広報、国際事業管理を担当したのち、本学に赴任。国際経営論、多国籍企業論などを担当。



TETSU FUJIMOTO

経済学部助教授。
1998年神戸大学大学院経営学研究科博士課程後期課程修了。博士（経営学）。1997年奈良産業大学経済学部経営学科講師。1999年同経営学部経営学科助教授。2003年4月より現職。中高生の頃はコンピュータの世界に進みたいと考えていたが、数学と物理ができなくて浪人。仕方なく入った経営学部で光が見えた。



MASANORI SEKINE

1997年明治大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得。同年高崎経済大学経済学部に講師として就任。2000年から助教授。現在の担当科目は、ベンチャービジネス論、イノベーション論、経営戦略論、戦略的経営論。

これら4冊の文献を、教科書として寸評してきたが、筆者が経営学を担当する教師であれば、講義用の教科書として井原（2000）を、プレゼン（ゼミ開始前の準備のためのゼミ）の輪読用に榎原（2002）を、ゼミの輪読用に伊丹・加護野（2003）を、そして夏休みのゼミ合宿用に沼上（2003）を採用するであろう。いずれも、経営学と経営の面白さに触れることのできる良書である。

ところで、新入生諸君は教科書をどのようなものと考えているだろうか。最低限習得すべき知識を整理した書物で、習得後は廃棄すべきものだろうか。教師が授業のなかで、それに沿って解説するガイドラインであろうか。たとえ高校まではそうであっても、大学ではいずれの答えも否である。そもそも、大学に「教科書」は不要なのではないだろうか。

大学の授業で指定される経営学関連の教科書や参考書は、大学生のみならず、多くの場合ビジネスマンをも対象にしている。知識の伝授だけでなく、筆者の主張がさまざまな形で盛り込まれていることが多い。推薦された文献を十分に読み込んで、それぞれの本の価値を自分で判断するようにしてほしい。そして、卒業後も手許において、再読すべき本を見つけてほしい。

大学の勉強をするときに授業で指定されている教科書だけを読んで分からずと思っていませんか。昔からある「読書百遍意自ずから通ず」という諺は、一面の真理を表していますが別の場合には間違っています。『Intro』の2004年版にも書きましたが、難しい本を読んで理解するためには、そのための予備知識が必要です。ですから難しい本を読まなければならない場合には、いきなり読み始めるのではなく、その分野の入門書や解説書から読み始めるのがいいのです。「急がば回れ」です。

シラバスを見よう。大学生協購買部の教科書売り場へ行こう。自分の履修する授業だけでなく、他の授業の教科書を手に取ってみよう。目次を見たり、中身をぱらぱらっと見よう。良さそうだと思ったら入手して自分の本棚に並べておこう。すぐに読む必要はない。何か分からない事が出てきたときに、関連するページを索引で探して読むだけでも随分違うものです。

経営学は、企業をいかに存続、成長させるかを主要なテーマにしています。したがって、経営学の理論は、企業業績を維持あるいは向上させるためのノウハウということができるでしょう（すべてではありませんが・・・）。ただし、ノウハウといっても、多様な企業に通用するよう抽象度が高くなっています。つまり、個別の企業に対して具体的かつ直接的にどう行動すればよいかを示す指針ではありません。結果として、「経営学の理論は実践では役に立たない」といわれることがあります。しかし、それは間違っています。抽象度の高い理論を実践においていかに応用するかが重要なのです。そこで、学生の皆さんには、経営学の理論を学ぶとともに、それを応用する力を養って頂きたいと思います。そのためには、実存する企業の事例を研究することが必要です。今回は、経営学の入門書を4冊ほど紹介しましたが、ある程度基礎知識を身に付けたら、次の段階では数多くの事例に触れてみて下さい。